様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４４１７
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ０３９４８

研究課題名（和文）10代母親の逆境的小児期体験(ACE)を踏まえた妊娠期からの訪問プログラム開発

研究課題名（英文）Program development focused on ACEs of teen mothers from pregnancy period

研究代表者
大川　聡子（OKAWA, Satoko）

関西医科大学・看護学部・教授

研究者番号：９０３６４０３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の4点である。
1）妊娠中から継続した家庭訪問を地域の子育て人材と協働して行なう意義、2）ACEを経験した10代母親は「特定妊婦」である割合が有意に高いが、保健師が妊娠期から支援を重点的に行うことで母子保健事業につながりうる。3）10代初産母親はACEの中でも「身体的虐待」「自然災害や事故によるストレス」を受けた割合が20代以上の母親と比較して有意に高い。4)ACEは10代母親の育児中の自尊心を低下させ、自尊心の低下が主観的健康感の低下をもたらす。本結果をもとに妊娠中からACEに着目し、地域の子育て人材と協働し自尊心を高めるかかわりを家庭訪問によって行うことが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は10代初産母親の逆境的小児期体験（ACE）に関して、日本で初めて行った調査である。調査によって、10代母親はACEの中でも「身体的虐待」と「自然災害や事故によるストレス」を受けている割合が高いことを示した。またACEは育児期の心身の健康状態のみならず、家計状況にも影響を及ぼしていることを示した。
本結果を公表することで、支援者に10代母親の妊娠・出産・育児期の支援の場においてACEに着目することの重要性を広く周知し、ACEを持つ母親に支援者が住民と協働して妊娠期から自尊心を高めるかかわりを続けていくことが、出産後の10代母親の心身の健康の維持向上や社会的不利の緩和につながると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The results of this study are as follows: 1) The significance of continuous home visit from pregnancy period in collaboration with local child care personnel; 2) Teenage mothers who experienced ACEs were significantly more likely to be "Specified pregnant women", however, focused support by Public Health Nurses(PHNs) from the pregnancy period could lead to maternal and child services of Public Health Center ; 3) Teenage first-time mothers were significantly more likely to be significantly more likely to have experienced “Physical Abuse” and “Stress from Natural Disasters or Accidents”than mothers in their 20s or older.4) ACEs led lower the self-esteem of teenage mothers while raising their children, and lower self-esteem leads to lower subjective sense of health.
Based on these results, it is important to focus on ACEs from teenage pregnancy, collaborate with local child-rearing personnel, and provide involvement to enhance self-esteem through home visits.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：逆境的小児期体験（ACE）　家庭訪問　10代母親　10代妊婦　若年母親　インタビュー　パス解析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

アメリカでは 10 代妊娠と逆境的小児期体験(Adverse Childhood Experience 以下 ACE)との関連が指摘され、ACE 項目の該当が多い女性は 10 代で妊娠する割合が高く、10 代母親の成人期の心理社会的負の要因は 10 代妊娠でなく、根底にある ACE に起因することが報告されている。一方国内では虐待の世代間連鎖に関する研究は多くなされているが、ACE に関する調査は乏しい。一般的に 10 代母親は社会的リスクを抱えていく可能性が高く、養育支援が必要な対象であると認識されており、養育支援の課題・内容を明瞭にするためには、わが国におけるその実態を調査する必要がある。

妊娠期からの家庭訪問の効果について、Zielinski ら(2009)は、妊娠期から乳児期にわたる定期的な家庭訪問が不適切な養育を予防し、その効果は子どもが思春期になるまで持続すると報告している。10 代母親を対象とした家庭訪問による介入研究では、アメリカで Smithbattle ら(2011)がメンタルヘルス支援に着目した支援を行い、うつ傾向が改善したこと、再妊娠率が減少したこと、母親と保健師の関係構築ができたことを報告している。ニュージーランドでは、Skerman(2012)が妊娠後期から継続して家庭訪問を実施し、訪問により看護師と信頼関係を構築でき、母乳育児率や予防接種の完了率が上がったことを報告している。このことから 10 代母親の特性を踏まえた、妊娠期からの家庭訪問プログラム開発が必要であると考えた。一方、児童虐待の世代間連鎖に関してはこれまで数多く報告されている(Watanabe, 2003,木本, 2007 西澤, 2010 等)が、家族の精神疾患、薬物乱用、家庭内暴力、離婚や別居、収監による親の不在など、家族の機能不全も含めて子ども期の成育環境を明らかにする ACE 調査は、日本では緒に就いたばかりである。これまでの報告では、ACE 経験 1 回以上の養育者が 28.3%(Isumi ら, 2016)であること、ACE と 4～12 歳での精神疾患の罹患に関連が見られ、特に親の精神疾患や家族間の暴力との関連が強いこと(Fujiwara ら, 2011)、ACE の中では親からのマルトリートメントが、愛着と自尊感情を介して抑うつ症状を予測する(鈴木, 2011)ことが報告されている。

本研究では、これまで申請者が複数の海外の研究者や実践家と家庭訪問に関する情報交換を行ってきた知見を活かして、10 代母親が持つ逆境的小児期体験(ACE)と、ACE が育児にもたらす影響について明らかにし、その特徴を踏まえた妊娠期からの家庭訪問による支援プログラムを開発することを目的とする。

２．研究の目的

本研究は 10 代母親の逆境的小児期体験(ACE)と、ACE が育児にもたらす影響について明らかにし、ACE 体験を持つ 10 代母親の特徴を踏まえた、妊娠期からの家庭訪問による支援プログラムを開発することを目的とする。

３．研究の方法

(1)　10 代妊婦・母親に家庭訪問を行った RCT 論文のシステマティックレビュー

本レビューでは、ランダム化比較試験（RCT）の主要な側面（サンプルサイズ、介入者）とその有効性を明らかにすることを目的とした。方法として、2018 年 4 月までに出版、もしくは博士論文として公開された論文をレビュー対象とし、対象言語は英語とした。検索語は “Adolescent pregnanc* or mother*”、“Teen* pregnanc* or mother*”and“Home visit* orbased* or health care” とし、Pub Med、Cochran、CINAHL、ERIC など 11 のデータベースを用いて検索した。抽出された文献を適格基準（1．10 代の妊産婦を対象、2．妊娠中から産後にわたる家庭訪問、3．ランダム化比較試験）に沿って抽出した。PRISMA 声明に従い、質的レビューにより内容を評価した。倫理的配慮として全ての作業を 2 名以上で行い、単語の意味を的確にくみとれるよう配慮した。

(2)　ACE を持つ 10 代母親への支援経過の分析

2016 年 8～9 月に A 市保健師に対して実施した 10 代母親の支援に関する質問紙調査の内容を、ACE の有無に焦点化して再分析した。調査内容は①回答者の基本属性（所属、年齢、保健師経験年数）、② 10 代妊婦との初回面接の際に情報収集すべき項目、③ 10 代母親と関わる際の工夫点とした。10 代妊婦を担当した保健師に対しては、① 10 代妊婦の生活歴（転入・転出の有無、両親の離婚、親からの暴力などの ACE に関する項目、支援者の状況）、② 10 代妊婦の妊娠歴・健康状態（これまでの妊娠経過、健康状態、経済的状況）、③出産後の子どもの状況（在胎週数、出生体重、基礎疾患の有無、乳幼児健診受診状況）、④妊娠中・産後の支援（電話・面接・訪問回数、支援の内容）とした。支援の内容としては、被虐待児の支援者に行った先行研究を参考に、「具体的育児指導」「子どもの発達過程を伝える」「パートナーとの関係調整」「事故予防」等の項目を調査した。⑤母親からの反応として、「4 か月児健診前に母親からコンタクトがある」「4 か月児健診来所状況」をたずねた。量的データは $\chi 2$ 検定および Fisher の直接確率法を行い、有意水準を 5%とした。質的データは、質的帰納的分析を行った。本研究は所属大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

(3)　未就学児を持つ母親の ACE の特徴と育児中の自尊心や育児感情、主観的健康感、経済的状況の調査

若年母親の回答が比較的得られやすいと考えたモバイルインターネット調査会社に委託し、未就学児を育てる第 1 子を 19 歳以下で出産した母親、20 歳以上で出産した母親、それぞれ 200 人、計 400 人のモニターに対し、モバイルアンケート調査を実施した。調査実施期間は 2020 年 11 月 ～ 2021 年 3 月。調査項目は、以下のとおりである。
①母親の基本属性；第 1 子年齢と初産年齢、同居している子どもの数、同居家族、学歴、主観的健康感、就業形態、パートナーの就業形態、経済状態。妊娠への批判・差別。②育児支援状況；育児支援者、夫・自身の母親への相談状況、相談者の有無③育児に対する思い；住田ら（1999）の育児不安尺をもとに、荒牧ら（2008）が作成した「育児への否定的・肯定的感情尺度」（以下、育児感情尺度）16 項目。④ ACE；Felitti らの調査と、Philadelphia Expanded ACE 調査および Isumi らの研究を参考に AC 項目を選定し、国内・海外研究者、保健師らから意見を聞いた。海外研究者からは、従来の ACE が庭内に特化されすぎていることへの批判があること、日本独自の ACE 項目を入れること、経済的困難に関する項目を入れるよう助言を受けた。このため、「経済的困難」と「自然災害や事故によるストレス」に関する項目を追加した。一方保健師からは、ACE 項目をアンケート調査でたずねる際の表現方法について助言を受け、心理的負担感を与えない表現を工夫し、9 項目を逆転項目とした。以上合計 11 項目を 4 件法でたずねた。⑤自尊心；Rosenberg（1962）が開発した自尊心尺度 を Mimura ら（2007）が翻訳した日本語版 RSES（ローゼンバーグ自尊心尺度）10 項目。⑥自由記載。

(4)　10 代母親と家族の成長過程における ACE と PACEs の影響

児童期・青年期の子どもを持つ 10 代で出産した母親へのインタビュー調査を行い、10 代母親と家族の持つ ACE と PACE を踏まえた支援のあり方を考察する。方法として、第 1 子を 10 代で出産した母親を対象に、個別もしくはグループインタビューを行った。実施期間は 2023 年 3 月～2024 年 2 月。得られたデータは質的記述的に分析した。

(5)　アメリカにおける ACE の研究動向の情報収集

共同研究者である、静岡大学人文社会学部 白井千晶教授、福山市立大学教育学部 正保正恵教授とともに、2023/11/12～2023/11/17 にアメリカに渡航し、アメリカ公衆衛生学会(APHA)における学会発表ならびに共同研究者との情報交換を行った。

また、2023/10/16～2023/10/19 に、家庭訪問や児童虐待・ネグレクトの防止、幼児期、レジリエンスを専門とする研究者や医師により開発された家庭訪問プログラム Lemonade for Life の訪問従事者向け研修を聴講し、ACE を持つ親への育児支援の方法について情報収集を行った。

４．研究成果

(1)　10 代妊婦・母親に家庭訪問を行った RCT 論文のシステマティックレビュー

データベースから 1,825 件が抽出され、最終的に適格基準を満たした論文は 44 件（31 研究）であった。実施国の多くはアメリカで 30 研究、研究参加者の合計は 9,862 人、介入者数は合計 5,237 人（範囲 25～ 808 人）であった。

抽出された 31 研究の介入効果について、複数件のものはカッコ内に数で示す。〔看護職・妊娠前〕は 5 研究で児の健康（3 件）、母の仕事・学業継続（2 件）、予防接種率、母乳育児、夫との関係、社会サービスへの期待であった。〔看護職・産後〕は 3 研究で児の発達、新生児期の逆境的体験、避妊の知識であった。〔パラプロフェッショナル・妊娠前〕は 14 研究で育児行動（8 件）、母のメンタルヘルス・自尊心（7 件）、繰り返す妊娠（2 件）、児の栄養（2 件）、安全な出産、子どもの発達、母の学業継続、薬物依存、ホームレス、母の体重、DV、養子・虐待報告のリスク、〔パラプロフェッショナル・産後〕は 9 研究で児の発達・体重（2 件）、母親のかかわり・ネグレクト（2 件）、24 か月以内の第二子出産、母の体重、学校復帰率が高いことが示された。

看護職・パラプロフェッショナルともに妊娠中から訪問を開始した研究が多く、妊娠中からの訪問では育児に関する内容のみならず、母親のメンタルヘルスや学業の継続・就業など、母親の生活基盤を支える効果があった。このため妊娠中から継続した家庭訪問を、パラプロフェッショナルなど地域の子育て人材と役割分担をしながら行なうことが重要であることが示唆された。

(2)　ACE を持つ 10 代母親への支援経過の分析

回答者数 47 人（回収率 94.0%）、10 代妊婦の分析対象事例は 110 人であった。10 代母親のうち ACE あり 45 人（40.9%）、なし 49 人（44.5%）であった。ACE ありの母親は、高校進学せず・中退、特定妊婦、出産年齢 18 歳未満、妊娠時の思いが「不安」、出産までに母となる決意が「あいまい・みられない」者が ACE なしの母親と比較して有意に高かった。ACE をもつ母親への保健師の支援として、妊娠届出提出後の面接・訪問、妊娠後期の電話・面接・訪問、

入院中の病院訪問を行う割合が有意に高く、4 か月児健診前に母親からコンタクトがある割合も有意に高かった。母親の子ども時代の逆境的体験が学校生活や妊娠への思い、そして母となる決意に影響をおよぼし続けていると考えられた。10 代母親の支援にあたっては、妊娠中から ACE の有無を把握し、ACE をもつ母親には妊娠後期から重点的な支援を行ない、保健師との関係づくりから集団における事業へと橋渡しすることが重要である。

図 1. ACE 有無別に見た 10 代妊婦の特徴

N=94

		ACEあり n=45	ACEなし n=49	*p*	
高校通学状況	進学せず･中退	27 (69.2)	9 (30.0)	0.001	** a)
パートナー	いるが連絡がとれない･いない	8 (17.8)	3 (6.1)	0.075	
予定した妊娠	いいえ	30 (69.8)	25 (51.0)	0.053	
特定妊婦	はい	26 (57.8)	9 (18.4)	＜ 0.001	*** a)
出産年齢	18歳未満	12 (27.9)	2 (3.9)	0.002	** a)
妊娠･出産に関する協力者	いない	1 (2.2)	2 (4.1)	0.532	
妊娠時の気持ち：嬉しい	いいえ	13 (28.9)	6 (12.2)	0.040	
妊娠時の気持ち：不安	はい	16 (35.6)	5 (10.2)	0.003	** a)
出産前に母となる決意を固めていた	曖昧･いいえ	8 (18.2)	0 (0.0)	0.003	**
児の体重	2499g以下	6 (13.3)	6 (12.2)	0.559	a)

a）カイ二乗検定を使用, その他はFisherの正確確率検定を使用した。*:p<0.05, **:1*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001
無回答が存在するため、合計値が一致しない場合がある

(3) **未就学児を持つ母親の ACE の特徴と育児中の自尊心や育児感情、主観的健康感、経済的状況の調査**

すべての項目に回答した 289 人（有効回答率 72.3%）を分析対象とした。回答者の平均年齢は 24.1±6.9 歳、初産 19 歳以下が 141 人、20 歳以上が 148 人であった。学歴は、中学卒業が 60 人（20.8%）、高校卒業が 107 人（37.0%）、専門・短大・大学等が 122 人（42.2%）であった。ACE 項目のなかで、最も回答者が多かったのは「経済的困難」が 166 人（57.4%）、次いで「家庭外のいじめや差別」100 人（34.6%）、次いで「家族間の DV」が 93 人（32.2%）、「心理的虐待」92 人（31.8%）であった（表 2）。尺度全体の Cronbach's α 係数は 0.706 であった。各項目に該当した場合を 1 点とし、合計数を初産年齢別に比較したところ、初産 10 代の ACE 数の中央値は 3.0、初産 20 代以上の中央値は 2.0 であり、有意な差がみられた（p＝0.002）。

初産年齢別の ACE 比較について、「そう思う・ややそう思う」を「はい」、「あまり思わない・全く思わない」を「いいえ」とし、χ^2 検定を行ったところ、10 代初産母親は「経済的困難」「身体的虐待」「心理的虐待」「自然災害や事故によるストレス」に「はい」と回答した者が 20 代以上と比較して有意に多かった。

10 代初産と ACE 項目との相関について Spearman の順位相関分析を行ったところ、有意確率 0。2 以下の項目は「経済的困難」「身体的ネグレクト」「身体的虐待」「心理的虐待」「家庭外のいじめや差別」「自然災害や事故によるストレス」「心理的ネグレクト」の 7 項目であった。このうち、「身体的虐待」と「心理的虐待」は、相関係数が 0.71 と高かったため、有意確率がより高かった「心理的虐待」を除外した。以上 6 項目を独立変数とし、初産年齢 10 代を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った。その結果、初産 10 代に関連がみられた ACE 項 目 は、「身体的虐待 」（OR＝2.67、CI＝1.08～6.58）、「自然災害や事故によるストレス」（OR＝2.88、CI＝1.33～6.25）、「家庭外のいじめや差別」（OR＝0.32、CI＝0.14～0.69）であった。

図 2. 10 代初産と ACE 項目との関連

N=289

項目		粗オッズ比	95%信頼区間	*p*値	調整オッズ比	95%信頼区間	*p*値
経済的に苦しい時期があった	いいえ	Reference			Reference		
（経済的困難）	はい	2.68	1.66-4.35	< 0.001	1.43	0.73-2.80	0.298
十分な食べ物や服を与えられた	はい	Reference			Reference		
（身体的ネグレクト）	いいえ	1.68	0.82-3.44	0.160	0.90	0.23-1.84	0.416
自分を大事な存在だと感じさせてくれる人が身近にいた	はい	Reference			Reference		
（心理的ネグレクト）	いいえ	1.58	0.88-2.84	0.127	0.81	0.30-1.80	0.499
親から暴力や体罰を受けたことはなかった	はい	Reference			Reference		
（身体的虐待）	いいえ	1.97	1.16-3.35	0.013	2.67	1.08-6.58	0.033
家庭の外でいじめや差別を受けたことはなかった	はい	Reference			Reference		
（家庭外のいじめ）	いいえ	0.66	0.40-1.07	0.094	0.32	0.14-0.69	0.004
自然災害や事故にあい大きなストレスを感じた	いいえ	Reference			Reference		
（自然災害や事故によるストレス）	はい	1.74	1.03-2.94	0.037	2.88	1.33-6.25	0.007

従属変数「初産年齢」10代＝1．20代以上＝0
最終学歴を調整変数として投入
Hosmer-Lemeshow検定 p=0.658, 判別的中率80.3%

次に仮説モデルをもとに、10 代初産母親 141 人、20 代初産母親 148 人のパス解析を行った結果、初産 10 代の ACE スコアと育児中の自尊心（β＝－.55）、家計の心配（β＝.23）、自尊心と主観的健康感「健康でない」（β＝－.76）に因果関係が認められた。図 2 に最終的なモデルで有意となったパスを示す。適合度指標は、χ2＝2.4（df＝2、p＝.303）、GFI＝.992、AGFI＝.958、CFI＝.972、RMSEA＝.037 であり、良好な適合度が得られた。

本内容は、アメリカ、アトランタで開催された第 151 回アメリカ公衆衛生学会において、「Which induces more social disadvantage in Japanese mothers' parenting: Adverse childhood experiences (ACEs) or teenage pregnancy?」と題したポスター発表を行った。アメリカでは、逆境的小児期体験(ACE）の影響に関する研究が進んでおり、逆境的小児期体験を測定する際に用いたスケールや、日本における逆境的小児期体験の状況、10 代母親が持つトラウマ体験など、参加者約 10 名から幅広く質問を受けた。一方で、ACE を緩和するためのレジリエンスを高める介入研究が進んでいることがわかった。

(4)　10 代母親と家族の成長過程における ACE と PACEs の影響

研究協力者は 5 名、初産年齢 16～19 歳、現在の年齢は 30～40 代で、全員が有職者であった。子どもの人数は 2～5 人、年齢は未就学児～20 代、初産時の夫は全員が妻と同年代であった。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを《　》、コードを〈　〉で示す。ACE にあたる《成育歴における逆境体験の認識》では、〈物にあたる父親〉や、〈親の愛情を知らない夫〉が抽出された。【妊娠・出産時の振り返り】では、《計画的に第 1 子を妊娠する》、《夫との不仲が顕在化》、《子育てに懸念を持たれることへの自覚》、《懸念に抵抗する育児》等が挙げられた。PACE の提供者として、両親、姉妹、親戚、配偶者の父母、前夫家族、担任教諭、助産師、保健師、10 代母親グループメンバー・スタッフ、第三者が抽出された。《10 代母親への支援のあり方》として、〈同年代のグループの必要性〉、〈心配するより信じてほしい〉等が挙げられた。

ACE は自尊心を低下させることが指摘されているが、《子育てに懸念を持たれることへの自覚》を持つことで、より自尊心が低下し孤立する可能性があるため、10 代母親を「信じる」かかわりが重要である。一方 PACE の提供者に第三者が挙げられていたことから、地域において育児に向き合う 10 代母親を尊重し、見守る土壌づくりが必要であると考える。

(5)　アメリカにおける ACE の研究動向の情報収集

アメリカ、セントルイスにおいて、科研費の共同研究者 Lee Smithbattle 名誉教授、Joannne Schneider 教授らとミーティングを行い、学会発表における参加者からの反応を共有した。今後の研究の方向性について、ACE 以外にもたくさんのトラウマのバリエーションがあることが考えられるため、10 代母親のトラウマ体験に関するインタビュー調査を行なうよう助言を受けた。また、福山市立大学の正保教授の希望があり、同大学の公衆衛生・社会公正学部、Nancy Weaver 教授とも面談する機会を得た。Weaver 教授からは、プログラムの短期的・長期的評価に関する助言を得ることができた。

Lemonade for Life の従事者向け研修では、ACE の世代間連鎖を予防するために介入する時期や方法、ACE のみならず個人の生き方に着目すること、トラウマを癒す「希望」の定義や効果について学ぶことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Lee Smithbattle, Wisitsri Phengnum, Anne Shagavah, Satoko Okawa	４．巻 44(4)
２．論文標題 Fathering on Tenuous Ground: A Qualitative Meta-Synthesis on Teen Fathering	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The American Journal of Maternal/Child Nursing	６．最初と最後の頁 186-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1097/NMC.0000000000000536	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 大川 聡子，谷村 美緒，廣地 彩香，眞壁 美香，吉田 有沙，安本 理抄，根来 佐由美，金谷 志子，上野 昌江	４．巻 23(2)
２．論文標題 10代母親への妊娠期から産後にわたる保健師の継続支援 ―逆境的小児期体験（ACE）の有無による比較―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本地域看護学会誌	６．最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20746/jachn.23.2_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大川 聡子，眞壁 美香，金谷 志子，上野 昌江	４．巻 26(1)
２．論文標題 10代初産母親の逆境的小児期体験（ACE）の特徴と育児中の心身の健康，経済的状況との関連	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本地域看護学会誌	６．最初と最後の頁 4-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20746/jachn.26.1_4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Satoko Okawa, Mika Makabe, Yukiko Kanaya, Yuko Yasuda, Chiaki Shirai, Masae Shouho, Kukiko Ogawa, Masae ueno, Akemi Morita
２．発表標題 The effects of adverse childhood experiences (ACEs) of teenage mothers on physical and mental health and economic status.
３．学会等名 26th East Asian Forum of Nursing Scholars: EAFONS（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中原洋子,安本 理抄,眞壁美香,水内久美，大川 聡子,上野 昌江
２．発表標題 子育て世代包括支援センターにおける妊娠中からの切れ目ない支援の検討　第1報　－妊娠届出時の母親の気持ちと生活背景－
３．学会等名 第11回日本公衆衛生看護学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 安本 理抄,中原洋子,眞壁美香,水内久美，大川 聡子,上野 昌江
２．発表標題 子育て世代包括支援センターにおける妊娠中からの切れ目ない支援の検討　 第2報－妊娠届出時面接アセスメント指標からの母親の実態－
３．学会等名 第11回日本公衆衛生看護学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大川聡子，眞壁美香，金谷志子，上野昌江
２．発表標題 未就学児を育てる母親の逆境的小児期体験(ACE)の実態と出産年齢による比較
３．学会等名 第24回日本地域看護学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大川聡子，眞壁美香，金谷志子，小川久貴子，上野昌江，甲田勝康
２．発表標題 未就学児育児中の母親における、過去の逆境的小児期体験（ACE）スコアと自尊心の関連
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Satoko Okawa, Marika Mizukom Yuki Nagahara
２．発表標題 Understanding the Impact of Adverse Childhood Experiences(ACEs) in Adolescent Motherhood
３．学会等名 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Satoko Okawa, Mika Makabe, Yukiko Kanaya, Yuko Yasuda, Chiaki Shirai, Masae Shouho, Kukiko Ogawa, Masae Ueno, Akemi Morita, Katsuyasu Kouda
２．発表標題 Which induces more social disadvantage in Japanese mothers' parenting: Adverse childhood experiences (ACEs) or teenage pregnancy?
３．学会等名 American Public Health Association 2023 Annual Meeting and Expo
４．発表年 2023年

１．発表者名 大川聡子，金谷志子，眞壁美香，大平俊介，寺田有里，廣地彩香
２．発表標題 若年母親を対象とした家庭訪問に関するシステマティックレビュー ランダム化比較試験による介入効果の比較
３．学会等名 第23回日本地域看護学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 安本理抄，上野昌江，大川聡子，根来佐由美
２．発表標題 乳児早期家庭訪問から支援が必要な親子の見極め：訪問日数による分析
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 上野昌江，安本理抄，大川聡子，根来佐由美
２．発表標題 乳児早期家庭訪問から支援が必要な親子の見極め：実母相談の分析
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大川聡子	４．発行年 2022年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 254
３．書名 TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述:保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究，11章 保健師が10代妊婦と家族を支援するプロセス―「寄り添う」と「介入」のはざまでの関係構築ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	眞壁　美香 (MAKABE Mika) (30844477)	四天王寺大学・看護学部・講師 (34420)	
研究分担者	金谷　志子 (KANAYA Yukiko) (00336611)	武庫川女子大学・看護学部・教授 (34517)	
研究分担者	安田　裕子 (YASUDA Yuko) (20437180)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	白井　千晶 (SHIRAI Chiaki) (50339652)	静岡大学・人文社会科学部・教授 (13801)	
研究分担者	正保　正惠 (SHOUHO Masae) (00249583)	福山市立大学・教育学部・教授 (25407)	
研究分担者	小川　久貴子 (OGAWA Kukiko) (70307651)	東京女子医科大学・看護学部・教授 (32653)	
研究分担者	上野　昌江 (UENO Masae) (70264827)	四天王寺大学・看護学部・教授 (34420)	
研究分担者	森田　明美 (MORITA Akemi) (70182235)	東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員 (32663)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Managing the Stress of Life Transitions	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関